沖縄県立芸術大学芸術文化研究所彙報

I 研究業務状況

(1) 2部門以上共通

1. 移動大学 in 伊平屋島 [担当: 芸術文化学部門、伝統工芸部門、伝統芸能部門]
[沖縄県立芸術大学移動大学 in 伊平屋島]

2021年12月19日(日)

会場: 伊平屋村産業連携拠点センター

紅型教室 講師: 宇良京子 泉佳那

写真教室 講師: 仲本賢 大城愛香

陶芸教室 講師: 金城宙矛

琉球芸能教室 講師: 比嘉いずみ 玉城理恵

空手教室 講師: 盧姜威

運営担当教員: 久万田晋 鈴木耕太 新田摂子

事務スタッフ: 平田利恵子

延べ参加人数: 12名

2. 沖縄県立芸術大学芸術文化研究所文化講座・沖縄学 [担当: 芸術文化学部門、
伝統工芸部門、伝統芸能部門]

講座テーマ「沖縄芸能のダイナミズム」(総合教育科目「沖縄学」としても開講)

※オンデマンド(YouTube)で開催

期間: 2021年4月14日～2021年7月28日(毎週水曜日)

第1回 4月14日 鈴木 耕太(芸術文化研究所准教授)

「近世琉球における組踊」

第2回 4月21日 鈴木 耕太(芸術文化研究所准教授)

「近現代の組踊」

第3回 4月28日 呉屋 淳子(沖縄県立芸術大学音楽学部准教授)

「伝統芸能の担い手をめぐって」

- 第4回 5月12日 呉屋 淳子（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授）
「沖縄の地域と伝統芸能」
- 第5回 5月19日 三島 わかな（沖縄県立芸術大学非常勤講師）
「沖縄イメージって、どのように創られたの？」
- 第6回 5月26日 大嶺 可代（芸術文化研究所共同研究員）
「沖縄における劇場・映画館の変遷」
- 第7回 6月2日 久万田 晋（芸術文化研究所教授）
「近現代エイサーの伝播状況」
- 第8回 6月9日 久万田 晋（芸術文化研究所教授）
「現代沖縄の創作エイサー」
- 第9回 6月16日 遠藤 美奈（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授）
「沖縄系移民と民俗芸能」
- 第10回 6月30日 遠藤 美奈（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授）
「沖縄系移民と琉球古典音楽」
- 第11回 7月7日 飯田 泰彦（竹富町教育委員会）
「八重山における祭りと饗宴」
- 第12回 7月14日 三島 わかな（沖縄県立芸術大学非常勤講師）
「読む文学から、聴く文学へ」
- 第13回 7月21日 小西 潤子（沖縄県立芸術大学音楽学部教授）
「沖縄の南洋踊りの系譜」
- 第14回 7月28日 久万田 晋（芸術文化研究所教授）
鈴木 耕太（芸術文化研究所准教授）
三島 わかな（沖縄県立芸術大学非常勤講師）
「座談会：全体のまとめ」

視聴回数合計：延べ3740回（2021年9月3日時点）

3. 令和3年度沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業 [担当:鈴木耕太（代表）・麻生伸一・比嘉いずみ / 専任・兼任教員以外のメンバー:波照間永吉・高良則子・仲嶺伸吾・高嶺久枝・阿嘉修・新垣俊道・西岡敏・仲原穰]

- Aしまくとぅばを用いた琉球芸能実践授業（琉球芸能専攻にて実施。）
- Bしまくとぅば講演会「誇らしゃしまくとぅば」（2021年12月。オンデマンド配信）
- C琉球芸能におけるしまくとぅば副教材の開発（2021年6月～）
- D首里系組踊勉強会開催（2021年4月～）・首里系組踊勉強会成果発表会（2021年3月。オンデマンド配信）
- E令和3年度しまくとぅば実践教育プログラム開発事業事業報告会（2022年2月。オンデマンド開催）
- F『琉球芸能用語事典（仮）』の編集

（2）芸術文化学部門

1. 地域文化の調査研究
 - a 組踊を中心とした琉球文学の研究 [担当：鈴木耕太准教授]
 - b 沖縄各地の伝統文化の調査研究 [担当：鈴木耕太准教授]
2. 沖縄文化の比較文化論的研究 [担当：波平八郎教授]
3. 沖縄文化の歴史学的研究 [担当：麻生伸一准教授]

（3）伝統工芸部門

1. 沖縄染織品の調査 [担当：新田摂子]
 - a 沖縄県立博物館所蔵 俵屋コレクションの調査、2021年1月
 - b 沖縄県立博物館所蔵 「琉球古紅型」の調査、2021年11月～12月
2. 沖縄伝統染織技法の研究 [担当：新田摂子]
 - a 復元された腰機による製織技法の研究
「腰機入門」沖縄県県立芸術大学芸術文化研究所文化講座、2021年11月17日、24日
3. 沖縄染織研究会運営 [担当：新田摂子]

（4）伝統芸能部門

1. 沖縄・奄美の民俗音楽の調査研究 [担当：久万田晋教授]
 - a 奄美大島・喜界島の芸能採譜資料の作成 [7～12月]

- b 沖縄本島エイサーの芸能関連資料の作成 [8月～10月]
- 2. 日本本土の音楽芸能文化の調査研究 [担当：久万田晋教授]
 - a 四国の民俗芸能に関する調査資料分析 [11月]
 - b 京都府の民俗芸能に関する調査資料分析 [12月]

Ⅱ 主要研究業績

- 1) 研究所員主要研究業績 (2020年1月～12月)
 - 1. 著者・編書 2. 論文 3. 作品発表・公演 4. 研究発表
 - 5. 解説等 6. 講演・放送 7. その他
- 2) 助成研究
 - 1. 平成30年度において研究代表者、研究分担者となっている科学研究費研究
 - a 研究代業者となっているもの b 研究分担者となっているもの
 - 2. 沖縄県立芸術大学関連助成券研究
 - 3. その他

(1) 研究所所長

久万田 晋 (教授、専任教員)

- 1)
 - 4. 研究発表「近現代沖縄におけるエイサーの展開」第20回コミュニティ政策学会沖縄大会シンポジウム<芸能とコミュニティ>にパネリストとして発表、2021年10月16日、沖縄市ミュージックタウン3F音市場ホール。
 - 4. 第20回コミュニティ政策学会沖縄大会シンポジウム<芸能とコミュニティ>分科会「各地エイサーを支えるコミュニティ」においてコーディネーター(司会進行)を務める。2021年10月17日、沖縄市ミュージックタウン3F音市場ホール。
 - 4. 研究発表「現地調査録音テープの公開方法－沖縄民謡データベースから」(金城厚と共同発表)日本民俗音楽学会第34回大会、2021年12月5日、

京都市：同志社大学今出川校地。

6. 基調講演「沖縄・奄美の民謡・歌謡・民俗芸能を俯瞰する」奄美沖縄民間文芸学会オンライン大会シンポジウム〈奄美沖縄の芸能と伝承〉(Zoom)、2021年9月11日。
6. 講義「近現代エイサーの分布状況」令和3年度沖縄県立芸術大学芸術文化研究所文化講座〈沖縄芸能のダイナミズム〉、2021年6月2日、オンデマンド配信 (YouTube)。
6. 講義「現代沖縄のエイサー」令和3年度沖縄県立芸術大学芸術文化研究所文化講座〈沖縄芸能のダイナミズム〉、2021年6月9日、オンデマンド配信 (YouTube)。
6. 講義(鈴木耕太・三島わかなの鼎談)「座談会：全体のまとめ」令和3年度沖縄県立芸術大学芸術文化研究所文化講座〈沖縄芸能のダイナミズム〉、2021年7月28日、オンデマンド配信 (YouTube)。
6. 講義「エイサーの起源と歴史 近代以前」がらまん文化講座、2021年8月、オンデマンド配信 (YouTube)。
6. 講義「エイサーの展開Ⅰ 明治～昭和前期」がらまん文化講座、2021年8月、オンデマンド配信 (YouTube)。
6. 講義「エイサーの展開Ⅱ 戦後のエイサー・コンクール」がらまん文化講座、2021年9月、オンデマンド配信 (YouTube)。
6. 講義「音楽から見るウスデーク・エイサー」沖縄県しまくとぅば普及センター〈しまくとぅば講師養成講座〉、2021年10月2日、名護市：沖縄北部雇用能力開発総合センター。
6. 講義「エイサーの展開Ⅲ 創作エイサー・県外のエイサー・観光とエイサーについて」がらまん文化講座、2021年10月、オンデマンド配信 (YouTube)。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑥ 宮古のクイチャー－伝統と創造の拮抗－」『e-magazine LATINA』(ウェブ雑誌) 2021年1月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑦ 奄美大島の八月踊り－男女の歌掛けと太鼓の響き－」『e-magazine LATINA』(ウェブ雑誌) 2021年2月。

7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑧ 沖縄の浜下り行事－祓い清めと女の遊び－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年3月。
7. 「＜特選沖縄の伝統芸能＞と地域の芸能について」『地域の伝統文化 継承の現状と課題 令和二年度 地域の文化継承・発信支援事業』沖縄県・沖縄県文化協会、2021年3月、pp.4-5。
7. 「今を生きるウチナーのうた」『ミュージックスタディ 沖縄県資料2・3下』（沖縄県中学校音楽教育研究会編）学宝社、2021年4月、pp.4-5。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑨ 歌がたなく奄美と八重山－騒ぎ歌《六調》の系譜－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年4月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑩ 沖縄のハーリー行事－爬虫船競漕と龍蛇神への願い－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年5月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑪ 沖縄の創作エイサー－伝統性と現代性の競合－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年6月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑫ 沖縄の木遣り歌＜国頭サバクイ＞」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年7月。
7. 「傍聴記」（持田明美氏発表「これは組踊か？ 上平川字の大蛇踊り」）に対して『東洋音楽学会沖縄支部通信 No.44』（東洋音楽学会 HP 公開）2021年8月3日、pp.3-4。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑬ 八重山のアンガマー帰還する祖先神との交流－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年8月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑭ 奄美大島のショチョガマ・平瀬マンカイ－夏の節目における稲霊の招来－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年9月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑮ 沖縄の豊年祭－夏の節目を祝う祭り－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年10月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑯ 沖縄・奄美における悲劇の女性伝説と歌」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）2021年11月。
7. 「連載 沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り⑰ 近代沖縄 芸能を地域に

伝えた人物－玉城金三の活躍－」『e-magazine LATINA』（ウェブ雑誌）
2021年12月。

2)

1. b 基盤研究 (C) 「奄美における文化の伝承・創生のメディア的展開とアイデンティティ形成に関する研究」(2019年度～2021年度) 研究代表者:
加藤晴明 (中京大学教授)

(2) 芸術文化学部門

鈴木 耕太 (准教授・専任教員)

1)

2. 「真喜志康忠と組踊ー沖縄芝居役者が重要無形文化財『組踊』保持者になった理由ー」『沖縄映画研究会3周年記念誌ー女優・真喜志きさ子ー』
沖縄映画研究会 2021年3月
2. 「近代沖縄組踊関連年表〈抄〉」『沖縄芸術の科学』第33号 2021年3月31日
3. 新作組踊「首里の路次楽」(脚本・演出) アイム・ユニバースてだこホール(小ホール)(上演日:2021年2月27日)
3. 組踊「フチュルイチムシ」ー歌う動物たちー 第17回おきなわ文学賞
しまくとぅば戯曲部門 佳作 2021年12月1日
4. 「『組踊誕生』試論」第100回沖縄文化協会公開研究発表会 アイム・ユニバースてだこホール市民交流室 2021年11月20日
4. 「沖永良部島における組踊の伝承」2021年奄美沖縄民間文芸学会(オンライン開催) 2021年9月11日
5. 「地域で伝承される組踊ー現状と希望ー」『地域の伝統文化 継承の現状と課題』沖縄県文化協会 2021年3月
5. 「すごいぞ組踊」『みんなの文化財図鑑』沖縄県教育委員会 2021年3月
5. 概要執筆「重要無形文化財(琉球古典音楽:照喜名朝一、中村一雄・組踊音楽歌三線:城間徳太郎、西江喜春・組踊音楽太鼓:比嘉聰)」『那覇市の文化財 令和2年度』那覇市文化財課 2021年3月
6. 「近世琉球における組踊」沖縄県立芸術大学芸術文化学研究所文化講座「沖

縄芸能のダイナミズム」第1回 2021年4月14日

6. 「近現代の組踊」沖縄県立芸術大学芸術文化学研究所文化講座「沖縄芸能のダイナミズム」第2回 2021年4月21日
6. 「組踊の『ジャンル』について考える」令和3年度組踊保存会第4回伝承者養成研修講座 伝統組踊保存会 2021年9月15日
6. 「首里城と芸能」第1回甦る首里城を守る会文化講座 甦る首里城を守る会 2021年12月25日
7. 「沖縄タイムス『ワラビー』琉球芸能紹介」『沖縄タイムス』2021年1月～12月（毎月第2日曜掲載）
7. 「琉球新報『聴事を求めて』」『琉球新報』2021年1月～12月（毎月第1・第2水曜日曜掲載）
7. 「ていーち Teach！しまくとぅばの魅力」『琉球新報りゅうPON』2021年10月17日
7. 取材記事「組踊の立方は24人の園児たち 創作「首里の路次楽」を公演」琉球新報 2021年4月1日

2)

1. 令和3年度において研究代表者、研究分担者となっている科学研究費研究
 - a 研究代表者となっているもの
基盤研究(C)「組踊台本の基礎的研究」[課題番号：21K00308]
 - b 研究分担者となっているもの
課題研究(C)「琉球王国の儀礼芸能の再現に関する芸能史的研究」
研究代表者：金城厚

波平 八郎（教授、兼任教員）

1)

7. 「能楽論と沖縄の伝統芸能」（沖縄県立芸術大学紀要第29号、2021年3月）

麻生 伸一（准教授・兼任教員）

1)

1. 著書・編著

(共著) 高良倉吉監修、島村幸一編『首里城を解く—文化財継承のための礎を築く』勉誠社、(分担執筆)「近世琉球期の首里城」

2. 論文

3. 作品発表・公演

4. 研究発表

「真栄平房昭『琉球海域史論』(上・下) 合評会—琉球史の視点から—」
琉球沖縄歴史学会 2021 年 8 月例会

5. 解説等

6. 講演・放送

「近世琉球の職人と王府」おきげい教養講座、2021 年 1 月 15 日 (オンライン)

「古文書からみる近世琉球」博物館文化講座 (沖縄県立博物館・美術館)、
2021 年 9 月 23 日 (オンライン)

「古文書の読み方 1」おきなわ県民カレッジ第 7 回美ら島沖縄学講座、2021
年 10 月 6 日、沖縄県南部合同庁舎

「古文書の読み方 2」おきなわ県民カレッジ第 9 回美ら島沖縄学講座、2021
年 11 月 10 日、沖縄県南部合同庁舎

7. その他

2)

1. a 基盤研究 (C) 21K00837 首里・首里城の儀礼に関する基礎的研究 (2021
年度 - 2026 年度) 研究代表者: 麻生伸一 (沖縄県立芸術大学)

1. b 基盤研究 (B) 19H01299 海域アジアにおける港市および港市国家の基
礎的研究: 広域的・多角的な視座から (2019 年度 - 2023 年度) 研究
代表者: 黒嶋敏 (東京大学)

1. b 基盤研究 (B) 18H00698 南西諸島における海上交通の復元的研究—「帆
船の時代」の「歴史航海図」— (2018 年度 - 2022 年度) 研究代表者:
四日市康博 (立教大学)

1. b 基盤研究 (B) 21H00589 奄美群島の葬墓制に関する考古学的研究 (2021
年 - 2026 年度) 研究代表者: 関根達人 (弘前大学)

1. b 基盤研究 (C) 21K00853 分散した琉球古文書の統合と活用に関する研究
(2021 年度 - 2025 年度) 研究代表者: 豊見山和行 (琉球大学)

(3) 伝統工芸部門

新田 摂子（講師、専任教員）

1)

2. 「日本本土で開かれた沖縄染織品の展覧会について」『沖縄芸術の科学』第33号、沖縄県立芸術大学附属研究所、2021年3月、pp.85-107
6. 「首里城と染織文化」首里城と琉球・沖縄文化、令和2年度沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座第14回、2021.1.27（オンデマンド配信）
6. 「腰機入門」沖縄県立芸術大学芸術文化研究所文化講座、2021.11.17、2021.11.24
7. 沖縄県立博物館での俵屋コレクションの調査、2021年1月
7. 沖縄県立博物館での「琉球古紅型」の調査、2021年11月～12月

2)

1. b 国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）19KK0005
「在欧沖縄染織品の調査とそのコレクションの成立に関する研究」、2019年～2023年、研究分担者、研究代表者：柳悦州（沖縄県立芸術大学名誉教授）

名護 朝和（教授、兼任教員）

1)

3. 型染額装「Pool」《線の誘惑 型染》
染、清流館（京都） 2021年2月26日～3月21日
3. 型染掛軸作品「月夜の花」《JTC テキスタイルの未来形 in 宝塚 2021》
宝塚市立文化芸術センター（兵庫） 2021年3月6日～3月28日
3. 型染パネル作品「花風」《新匠工芸会展》
東京都美術館 2021年10月8日～14日 京都市美術館別館 10月20日～24日
7. 展評「田島征彦 型染と絵本原画展」沖縄タイムス 2021年1月6日

山田 聡（教授、兼任教員）

1)

3. 作品発表・公演

《面取網代文三彩抱瓶》琉球王国文化遺産集積・再興事業 複製制作品
2021 年度巡回展 九州国立博物館、東京国立博物館他

6. 講演・放送

特記なし

7. その他

五芸祭 特別企画 作品講評会 講評担当 (2021 年 9 月) リモート
美術系大学陶磁器分野交流企画(全3回) 内1回ファシリテーター(2021
年 10 ~ 11 月) リモート

(4) 伝統芸能部門

高瀬 澄子 (教授、兼任教員)

1)

4. 「彦根城博物館所蔵「律呂図板」の構造と理論」 中日音楽比較研究及び
團伊玖磨先生音楽創作研究国際学術シンポジウム 福建師範大学 2021
年 5 月 18 日 (録画開催)

2)

1. a 基盤研究(C) 課題番号 18K00135 「『歌道要法』の研究」 研究代
表者: 高瀬澄子 2021 年度: 0 円 (直接経費)
1. b 基盤研究(C) 課題番号 20K00132 「琉球王国の儀礼芸能の再現に
関する芸能史的研究」 研究代表者: 金城厚 2021 年度: 120 万円(直
接経費)

比嘉 いずみ (准教授、兼任教員)

1)

3. NHK「にっぽんの芸能」放映 (収録: 国立劇場おきなわ 大劇場)「本貫花」
インタビュー 2021 年 2 月 19 日
3. 国立劇場おきなわ主催 琉球舞踊鑑賞会(国立劇場おきなわ:大劇場)「作
田」2021 年 7 月 24 日
3. 那覇市テンプス館主催 木曜芸能 百花繚乱(那覇市テンプス館ホール)「諸

屯」2021年11月11日

6. 国立劇場おきなわステージガイド 2021年11月号 「思い出名舞台7」
インタビュー掲載
6. 沖縄県立芸術大学しまくとぅば実践教育プログラム開発事業 オンデマ
ンド教材収録「舞踊基礎③」解説担当 (沖縄県立芸術大学:奏楽堂ホー
ル) 2021年12月21日
7. 琉球新報社主催第55回琉球古典芸能コンクール (優秀部門審査委員)
2021年8月28日～9月3日
7. 琉球新報小中学生新聞りゅうPOM「ていーち Teach !! しまくとぅば3」
掲載「琉球舞踊にまつわる言葉」 2021年12月19日

沖縄県立芸術大学芸術文化研究所文化講座「沖縄芸能のダイナミズム」要旨集 第1回 近世琉球における組踊

鈴木耕太（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所准教授）

組踊は1719年、玉城朝薫によって創作され、尚敬王冊封の重陽宴にて上演された。その後、組踊は冊封使を歓待する場面で上演されることが通例になる。

組踊は現在約70番の作品が残されているが、冊封などでの上演が確認できるのは24作品である。冊封の上演は宴の行われる場で変わることが資料からうかがえる。すなわち、七宴と呼ばれる大宴のうち、首里城で行われる場合には正方形舞台上に橋掛りがついた構造、那覇の天使館で行う場合には、橋掛りのない長方形の舞台、弁ヶ嶽や末吉宮に冊封使を連れて行った後は、王子の屋敷の二番座において上演されるため、「組踊専用の舞台」というものは当初からなかったと考えられる。

近世の組踊上演に用いられた衣裳や小道具についても少ない資料からその様子がうかがえる。楽器のうち大鼓と小鼓は大和へ皮と「しらべ」を発注している様子から、現在の琉球楽器以外に和楽器を用いた演奏形式だったことがわかる。小道具のうち、琉球側で製作するものと、大和へ発注するものがある。さらに現在の上演と異なるのは、「二童敵討」の酒宴の場で用いられる酒具のうち、あまおへ側が用いる盃は、あまおへの耳盃一つと、供の者の使用する盃が4つとなっている。また、現在は木製のものを使用しているが、当時は錫製のものを使用していた。盃の数が現在より多いことから、現在の演出では酒を飲まない「きやうちやこ持ち」が当時は酒を飲む所作があったことが想像できる。

組踊は琉球王国時代からどのように現在へと伝わったか、というのは詳細がわかっていない。しかし近世の資料を用いることで、現代の演出とは異なることが自ずと見えてくるのである。モノや空間を通じて芸能の伝承を考えることも、今後の琉球芸能には必要なことであると提案したい。

第2回 近世琉球における組踊

鈴木耕太（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所准教授）

琉球は1879年に「琉球処分」を迎え、沖縄県となるが、その時に王府の儀式というものの多くが失われた。組踊も例外ではない。冊封そのものがなくなると、上演する「場」がなくなる。そして商業演劇が興ったとき、庶民に向けて演じられたのは「古典」芸能であった。

近代沖縄の芸能の様子は当時の新聞資料などからうかがい知ることができる。しかしながら、新聞の発刊が行われる前は、その状況もほとんどわからないのが現状である。玉城盛重が語った半生には、自身の青年期の琉球芸能の様子がよく表れている。稽古は奥武山の「寺」（龍洞寺）で行い、上演は思案橋付近の料亭の二階で無許可興行を行っていたようである。当時は「思案橋の芝居」という認可された劇場（無天蓋）があったらしいが、遊興取締令が布達されたため、警察の目をかすめながらの上演だった。

そののち、本建築の芝居小屋ができ、琉球芸能を上演するよりも本土からの壮士芝居など

に人気を取られたり、日露戦争などの影響で上演数が減ったりして組踊は旧正月や浜下り等の行事の近くに上演されることが多くなった。そのような状況下、明治40年に沖縄座が組踊上演を銘打ち、約1年間、様々な組踊を上演する。

しかし、組踊上演は振るわず大正時代に入ると上演回数は少なくなる。大正時代には組踊を「国劇」「古典劇」「古劇」と呼び、「古劇保存運動」まで興るが、成功せずに終わる。それからは芝居小屋での上演ではなく、県外からやってきた要人をもてなす際に上演するという上演スタイルが昭和に入ってからでも継続する。

組踊の価値を変えるのは昭和11年、東京で行われた「琉球古典芸能大会」である。本公演で組踊や琉球古典芸能は研究者や知識人から一定の価値を認められ、当時の参加者の中から日劇ダンシングチームの「琉球レビュー」などの舞踊の指導を行う者が出る。そして太平洋戦争を向かえ、多くの人名と芸能文化を失うことになる。

組踊は現在、沖縄を代表する芸能であるが、近代におけるその上演を見ると、平坦なものではないことがわかる。近世と現代の上演に差異が見られるのは、この近代という時代の上演史に原因の一端があると思われる。

第3回 伝統芸能の「担い手」をめぐる——現代から問い直す組踊の継承

呉屋淳子（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授）

これまで発表者は、民俗芸能や伝統芸能を「継承」する人々に関心を持ち、文化人類学の視点から研究活動を行ってきた。また、研究を通じて、若き担い手たちによって、これまで地域で受け継がれてきた芸能に新たな創造性が付与されていくという「場」にも出会った。彼らと過ごす時間は、発表者にとって「もしかしたら、いま目の前にある新しい芸能は100年後の「伝統」になっているかもしれない」と夢をふくらませる貴重な機会となった。

一方、伝統芸能の世界に、どこか息苦しさを感じたり、違和感を覚えたりすることがあるのも事実である。とくに衝撃を受けたのは、沖縄において職業的な芸能家を目指して、伝統芸能を学ぶ若者たちが将来への諦めを口にするのを聞いたり、この世界でどう生き残るかという不安に支配されたりしていることを知ったときだった。

今回の講座では、「仮構論」の枠組みを「琉球芸能」に援用し、現在にいたるその「継承」が文化的・政治的な文脈の中で「創出されたもの」であることを考えてみたい。特に、組踊の「重要無形文化財」の指定をめぐる経緯については、当時の時代的な文脈を踏まえた検証は、いまだ十分になされているとは言えない。そこで、組踊の「重要無形文化財」の指定がどのように行われていったのか、またその指定が組踊の継承にどのような変化を及ぼしたのかを、当時の資料や当事者たちの言説をもとに検証していく。

「担い手」とは、抽象的な存在ではなく、「担い手」自身がある特定の歴史的・文化的状況の中を生きる個人である。そのことを「琉球芸能の現代史を再検証すること」と「文化人類学的な考察を行うこと」を行き来しながら問い直してみたい。問い直すことで、未来をつくる現在進行形の「いま」を推し量る、座標軸を持つことを示すことが、今回の講座の目的である。

第4回 沖縄の地域と伝統芸能——八重山の「学校芸能」から考える地域文化の継承

呉屋淳子（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授）

沖縄では、地域コミュニティの集落単位である「字」ごとに、その土地独自の儀礼や芸能が大切に受け継がれている場所も少なくない。それぞれの地域では、一年の暦に沿っていくつもの行事が行われ、行事ごとに様々な種類の芸能が演じられる。こうした「場」において芸能の上演を担うのは、職業的な芸能家というよりも、主に地域コミュニティを構成する老若男女の多様な生活者である。それだけ、地域の芸能は、その土地の生活や生業と密接に結びつきながら、大切に育まれてきたと言える。

一方で、現代社会において、地域とは決して一枚岩なものではなく、開発による生活環境の変化や人口流出など、様々な脆弱性を孕んだものでもある。社会の流動性が加速度的に高まっていく中で、かつては地縁や血縁で結ばれていた旧来の地域コミュニティのあり方も大きく変容している。このように変容し続ける地域社会における伝統芸能や民俗芸能を考えるために、今回の講座では、発表者の著書『学校芸能の民族誌』をもとに、学校という「場」が八重山の地域文化の継承に果たす役割に着目してみたい。

「学校芸能」とは、学校で行われている民俗芸能の実践を分析するために、『学校芸能の民族誌』の中で提案した概念で、学校教育の現場から、民俗芸能の継承の理解に向けた新たな視座を提供しようとするものである。「学校芸能」の特徴は、それが学校と地域社会の相互作用の過程で継承されると同時に、新たに創造されるものを捉えるための視点である。発表者は民俗芸能を「真正性 authenticity」という視点から捉える従来の民俗芸能研究のスタンスに対して、民俗芸能とはそれぞれの社会の中で、様々なアクターの相互作用から生成する文化であると捉えたいと考えている。

今回の講座では、こうした「学校芸能」の様々な側面について、八重山の事例を紹介しながら、その歩みをたどることで、今を生きる私たちが、地域文化の継承をどのように捉え、考えていくべきか、その持続可能な未来のあり方についても提言したい。

第5回 沖縄イメージって、どのように創られたの？～戦前の日本放送協会のラジオ番組より～

三島わかな（沖縄県立芸術大学非常勤講師）

本講座では、まず自己紹介をかねて、講師みずからの研究領域と研究概要をお伝えし、さらに「異文化が、特定の地域に新たに流入することによって、その地域にそれまで存在してきた文化が、その後、どのように変化・変容するのか、…といった「文化変容」に対する研究視座について解説した。なぜなら『沖縄芸能のダイナミズム』第4章「地域の音文化は電波に乗って～戦前のラジオ番組にみる沖縄イメージ～」(179～247頁)をもとに構成した本講座も、そういった視座や関心が貫かれていることによる。

本講座では『沖縄芸能のダイナミズム』第4章のなかから、第4節に絞って取り上げた。そこで本講座のポイントは次の点、すなわち、日本では大正時代の終わりにスタートした「ラジオ放送」という新たなメディアでの番組づくりを通して、日本各地の音文化は番組素材としてどのように切り取られ、どのような意味づけのもとでリスナーの元へ届けられたのか、にある。

本題に入る前に、イントロダクションにおいて「心象・イメージ」および「アイデンティティ」の概念を整理し、さらに「沖縄イメージ」について受講生へ問いかけた。「青い海・青い空・白い砂浜」「トロピカル・リゾート」等の現代の我々が思い浮かべるところの「沖縄イメージ」は戦後のあゆみのなかで形成されたものではなく、本講義の本題として取り上げる戦前のラジオ番組「府県めぐり～沖縄県の巻～」のなかで、そのハシリが見られるのである。

本講義のまとめは次の通りである。アイデンティティとは〈関係と表象のシステム〉なのであり、システムとしてアイデンティティを見ることによって、それは所与のものとして静的に存在するのではなく、ダイナミックで常にコンフリクト（衝突）を生み出す可能性のある概念となる。アイデンティティとは〈他者〉の存在なしで育まれることはなく、そして誰を〈他者〉と見るかによって、そこに構築される自己イメージそしてアイデンティティも常に変化していくのである。

第6回 沖縄における劇場・映画館の変遷

大嶺可代（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所共同研究員）

今回は1) 明治時代から戦前まで沖縄にあった劇場／映画館について。2) 終戦直後に存在した劇場／映画館について（アーニーパイル国際劇場、中央劇場、石川の新興劇場、佐敷の馬天劇場など）。3) 琉球政府時代の電話帳にみる劇場／映画館について。4) 石垣島、宮古島の劇場／映画館についてフィールドワークを踏まえ跡地写真などを紹介。5) 1970年以降の公共ホール等を用いた芸能活動について。沖縄ジャンジャン、沖映演劇から1990年代の県立郷土劇場、具志川市（現うるま市）芸術劇場、佐敷町シュガーホール、沖縄市民小劇場あしびなー。シネマパレットに代表される都市型映画館、ミハマセブンプレックスに代表される郊外型、複合型映画館。2000年代に開館した那覇文化テンプス館、2010年開館の国立劇場おきなわや、近年話題のミニシアターについても触れた。

2020年の年明けからコロナウイルスによる感染拡大が叫ばれる中、ことに劇場／映画館は密集・密接・密閉という「三密」な空間として取り締まりの槍玉にあげられ、演技者・表現者らの発表の機会が奪われつづけた。with コロナという掛け声のもとに感染症対策を徹底しながら公演を行う試みがある一方、クラウドファンディングなどの手法やオンラインチケット販売、当公開講座のようにYouTubeやzoomなどを用いた動画配信などが行われるようになった。沖縄ならではのアプローチの例として、演劇研究者の澤井万七美氏が行った対談企画（演出家の平田大一氏、宜野座村がらまんホールの館長・小越（おごし）友也氏『演劇学論集 紀要71』所収）を紹介した。

いまなおコロナウイルスの猛威がある中、現時点において沖縄県内の劇場／映画館の動向を総括することは非常に難しい。芸能とは、芸術活動とは何であるのか、我々人間は今後どのような表現を模索し、社会の中で共有していけばよいのか。今回の講義が受講者に今後の劇場／映画館のありかたについて捉え直すきっかけを与えることができれば幸いである。

第7回 近現代エイサーの伝播状況

久万田晋（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所教授）

本講義では、以下の三点について説明を行った。第一に、エイサーの分類と地域的分布では、エイサーの分類について解説した。1) 太鼓エイサー：本島中部を中心に広く分布している。男の太太鼓、締太鼓の後に女の手踊りが続く。2) パーランクーエイサー：沖縄本島中部うるま市近辺を中心に分布する。男のパーランクーの後に男女の手踊りが続く。3) 男女の手踊りエイサー：本部半島を中心に分布する。地謡が乗った櫓の周りに男女の手踊りが並ぶ。4) 女の手踊りエイサー：国頭村西海岸、大宜味村に分布する。女だけの手踊りによって踊られ、地謡は三線を使わない。

第二に、エイサー・コンクールについて概略を説明した。1950年代から盛んとなったコンクールの様子と評価基準、それによって太鼓の増加（大太鼓、締太鼓）、衣装の確立、女性の躍進、複雑な隊列踊りの工夫、新民謡の導入などコンクールを通じて変化した要素について説明した。

第三に現代における沖縄本島エイサーの伝播状況を説明した。ここでは沖縄本島北部（名護市）、中部（宜野湾市）、南部（南部全域）の具体的な事例を通じてエイサー伝播について説明した。まとめとして以下の点を指摘した。1) 1960年代以降、沖縄本島各地のエイサー様式に、従来からの民俗的・地域的分布はいまやなかなか当てはまらない。2) どの地区の様式が新たに伝播するかはその時期の流行（コンクール入賞、知名度等）や特定の人間関係による。3) 各地域の拠点的地区から、さらに親→子→孫→曾孫関係のように派生的に伝播していくことがある。4) こうしたことから、現代社会状況におけるエイサー状況は各様式の複雑なモザイクの様相だと捉えるべきである。

最後に、次回講義で扱う1980年代創作エイサーの登場、県外各地へのエイサーの伝播についても予告的に説明した。

第8回 現代沖縄の創作エイサー

久万田晋（沖縄県立芸術大学芸術文化研究所教授）

本講義では、創作エイサーの概要、県外へのエイサーの伝播状況、そして現代の創作エイサーの活動状況について講義した。

まず創作エイサーの概要について解説した。1980年代には従来の地域の青年会によるエイサーとは組織原理が異なる創作エイサー団体が登場した。これらの団体は特定の地域に依拠しない自由参加型であり、年齢や性別にも寛容である。さらに県外や海外に積極的に支

部を作り季節や場所に縛られない幅広い活動を展開している。こうした創作エイサー隆盛の事例として、沖縄県で2011年から開催されている世界エイサー大会を紹介した。

続いて1972年の沖縄の日本復帰以降、県外にエイサーが伝わり、首都圏、中京圏、関西圏等において多くのエイサー団体が結成されている状況を説明した。その事例として沖縄市エイサー会館によるエイサーネットワーク事業（2018年8月）を紹介した。これは全国各地で活動しているエイサー団体の代表者を招聘し、各団体の活動報告と情報交換、そして地元青年会との交流を促進するものである。県外から参加10団体のうち県内の特定の青年会とつながりを持つ7団体、特定の創作エイサー団体とつながりを持つ3団体について説明した。

最後に、こうした沖縄における青年会エイサーと県外・海外のエイサー団体（青年会系・創作系）の間でエイサーをめぐる価値観の葛藤が生じている状況について説明した。エイサーは本来民俗芸能であったが、戦後沖縄のコンクールの隆盛により不特定多数の観客に訴えるパフォーマンスとして発展してきた。また1980年代以降、創作エイサー団体が登場し、さらに県外・海外にもエイサーが伝わっている。この状況からは、いまやエイサーは「世界文化」となったともいえる。その一方で「エイサーとは何か？今後どうあるべきか？」という問いをめぐって、様々な認識や価値観がぶつかり合っている状況である。今後は、各々の立場を越えて相互的対話を進めていくべきであろう。

第9回 沖縄系移民と民俗芸能

遠藤美奈（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授）

沖縄県は、戦前から海外移民を多く輩出した県の一つである。その始まりは、廃藩置県の約20年後にあたる。こんにちでは一般的となった多文化への理解も、かつては相互に理解し合うことは容易なものではなかった。沖縄県出身者らは、日本国からの移民として海を渡ったが、「同じ」国からの本土出身者とは、文化的な差異の壁に直面し深い軋轢を生じさせていた。移民社会では、日本で活躍する著名人が寄港することで日系人に多大な活力を与えた。それは沖縄県出身者でも同様で、さらには、沖縄県出身者が日系社会で活躍することもまた、本土出身者との軋轢を埋めるのに少なからず影響をもたらした。

本回では、上述の歴史背景をふまえ、ハワイの沖縄系移民の芸能実践として、初期の沖縄県人会による演芸会、寺院で催された琉球盆踊から現代に受け継がれるオキナワン・ボン・ダンスや周辺芸能について映像を用いて紹介した。

琉球盆踊は、1909年頃にカウアイ島ケカハ耕地で仲真良永（泡瀬出身）らによってはじまったとされている。名称は、エイサーと同義語的だが、中央に櫓を立て円陣で老若男女が踊るもので、沖縄の青年会エイサーとは様相が異なる。1930年代には、東京音頭をはじめとする新しい盆踊り演目がハワイへ移入すると、各県ゆかりの盆踊りや新演目による盆踊り競演大会が各地で繰り広げられた。琉球盆踊は各地の大会で一等を獲得し、高い名声を得ていった。同時期、沖縄県出身僧侶を中心として、マウイ島では妙心寺派臨濟宗ハワイ開教院、オアフ島では浄土真宗本願寺派慈光園が建立された。琉球盆踊はこれらの寺院を継承の中心地

として、現在まで各寺院で親しまれている。

さらに新しい世代による実践例として、獅子お越しの儀式やマウイ島で創作されたウスデークを紹介した。人の移動は、人を媒介してかの地へと芸能を越境させるが、ハワイでの命脈が途切れることはなかった。故郷を離れていても移民社会は、沖縄芸能の一翼を担い続けていることを痛感させる。

第10回 沖縄系移民と琉球古典音楽

遠藤美奈（沖縄県立芸術大学音楽学部准教授）

移民は出稼ぎを目的としていることから、生活に文化的な豊さを想像することは難しいかもしれない。日系移民が入植したハワイは、日本からの定期的な船舶や日系新聞の刊行が早く、世界の情勢にも明るかった。そのため人々と芸能の関係は充実していて、早い時期から日本からの巡回興行やハワイで三味線からピアノまでお稽古ごとができた。また、日系仏教寺院の建立に伴い、学校の併設などが進み、学芸会などが催され子ども達まで多彩な芸能に親しむ環境が整えられていった。

では、琉球古典音楽はどのようにハワイへ定着したのか。それを支えた戦前までの出来事を5つの段階①優れた三線奏者の移民とその活躍、②ハワイ移民への教授、③楽譜の流通、④教習の本格化、⑤沖縄からの演奏者・芸能団の来布に分けて紹介した。とりわけ興味深い動きは、④の時期に三線技術の習得を目的として、出稼ぎを一時中止して沖縄へ戻り、著名な奏者へ弟子入りして研鑽を積んでいたことである。自発的な習得のみならず、沖縄県人会が三線の技量の優れた人物を選抜して沖縄へ送り出したこともあった。帰布した奏者の技はハワイへも環流し、多くの奏者を育てることにつながり、故郷沖縄の音楽文化が深く根付くことにも結びついた。

他方、移民先が違えばその定着過程は異なった。南米ブラジルでは、戦前から組踊などの芸能上演が散見されるものの、戦後になってから沖縄から研究者らが来伯したことで、琉球古典音楽の流派の支部化が進み、安定的な定着を支えた。広大な土地を指導者が巡回し教習を行い、各地で愛好者を増やし、やがてブラジル独自のコンクール（沖縄のコンクールを模倣して）を主催するに至った。

規範を持つ琉球古典音楽は、どの地域においても沖縄を本部とする流派の支部を中心に嗜まれている。二世や三世らが師範として活躍している地域も少なくない。新しい世代が継ぐ沖縄芸能は故郷とどの様な接点を生み出していくのか、すでに新しい動きが始まっているようだ。

第11回 八重山における祭りと饗宴

飯田泰彦（竹富町教育委員会）

拙稿「八重山の祝宴に関する一考察」（『沖縄芸能のダイナミズム』収録）は、祝宴を「祝意を表した宴会」と定義し、「祝儀」と「饗宴」によって構成されていることを前提としたため、

祝意を表した儀式・儀礼、あるいは式典までを「祝儀」とすることにした。そして、祝宴を「伝統的な村落祭祀に伴う祝宴」(公的祝宴)と「人生儀礼の祝宴」(私的祝宴)に分類し、祝宴の生成と展開を考察した。

本講座「八重山における祭りと饗宴」では、この20年間に行われた、「伝統的な村落祭祀に伴う祝宴」に焦点をしばり、それを饗宴と捉え、そこで演じられる芸能を位置づけることを目的にお話した。

「饗宴」の「饗(あえ)」という文字には、酒食を設けて客をもてなすことや、「神人共食」の意味があるように、「饗宴」は神饌(供物)や料理・酒に重きをおいた呼称といえる。八重山の祭祀において、奉納芸能の演者に対して、「いい供物を飾って下さいね」という言葉をかけることがある。それは芸能も神に捧げる大切な供物であることを物語っている。

このことは奉納芸能を演じる舞台の多くが神のまします聖域(イビ)に向かって設営されていること、また新城上地島の歌謡《儀式ゆんた》(『南島歌謡大成Ⅳ 八重山篇』ユンタ222)の内容などにもうかがえる。つまり、「饗宴」に神が介在するのである。

八重山の年中行事のうち、作物の生長過程における祭祀は厳粛な祈願や呪術的な儀礼が中心に執り行なわれるが、稲の収穫を終えてから次の播種時に行われる祭祀、例えば小浜島の結願祭、西表島祖納・干立の節祭、竹富島の種子取祭などでは奉納芸能を中心とした饗宴形式がみられる。これらの「饗宴」は〈長者の大主〉系の芸態が全体を統括する一つの様式であることが指摘できる。

ところで、2020、2021年はコロナ禍により、暮らしのあらゆる面で制限されることになった。講座のなかでは、伝統的な村落祭祀においても、その多くが「祝儀」(神事を中心とした儀礼)のみ執行され、「饗宴」(奉納芸能、祝宴)は縮小、または中止せざるをえない事態にも触れた。このことがいみじくも祭祀の持つ意味や、構造を改めて考える契機になったことも記しておく。

第12回 読む文学から、聴く文学へ ～戦前の日本放送協会のラジオ番組より～ 三島わかな(沖縄県立芸術大学非常勤講師)

本講座では、まず、イントロダクションとして「口承文芸の世界」を地域的にも広く見渡した。すなわち、中世ヨーロッパの吟遊詩人、中世日本の琵琶法師、近世日本の浪曲師らの語り物の世界を解説し、動画によって響きを味わった。ここでのポイントは、世界の人びとは「読む・書かれた文学」よりも、はるかに長い歳月を「聴く・語られる文学」として楽しんできたことを確認することである。

そのうえで、20世紀に登場した「録音」という新たなテクノロジーによって、これらの口承文学・口承文芸はレコーディングされ、レコード産業界の商品として普及した。同様に、近世琉球に成立した芸能である「組踊」もさまざまなレコード会社からレコーディングされ、沖縄という場所を離れた全国各地、ひいては海外の人びとも、その響きを堪能することができるような時代になったことを解説した。

そういう流れのなかで、日本では1925年にスタートしたラジオ放送でも当然ながら口承文芸を扱った番組は大人気を博した。これら演芸番組のみならず、さらには「ラジオドラマ」という新種の放送カテゴリーにおいては、日本各地のローカルティや地方の方言にそなわる独特の響きを重視したドラマ番組が作られはじめた。そこで組踊の一演目である「大川敵討」も注目されることとなり、具体的にラジオ番組としては、詩劇「大川敵討～琉球古曲〈組踊〉に基く音楽劇」ならびに、そのリメイク版の音楽劇「大川敵討」として二度にわたって放送されたのだった。

本題では、詩劇および音楽劇の制作スタッフを整理し、ラジオドラマの作品構成や手法について、原作の組踊と比較をはかり、さらにリメイクの意味を探った。

本講義のまとめは次の通りである。琉歌独特の韻律（8・8・8・6）から生まれるリズムを基調として琉歌の韻律を温存させた点は「伝統の保守」であり、一方で標準語と琉球語を共存させて「言葉の組み合わせのあらゆる効果」を追求した点は「創造的行為」と結論づけた。

つまり、この番組は琉球の「伝統性」に新たな生命を注ぎこむ試みであり、そこでは西洋楽器や洋楽曲の使用の際にはコトバを付けず、シンボル音として扱った。すなわち、ここの一番の臨場感・クライマックスを作り出す役割（心理表現）が西洋楽器の役割であり、登場人物の心情表現ではないことを指摘した。

第13回 沖縄の南洋踊りの系譜

小西潤子（沖縄県立芸術大学音楽学部教授）

戦前、日本統治下におかれた旧南洋群島には、多くの沖縄県民が渡ってサトウキビ栽培や漁業、商業活動等に従事した。その数は、1940年代には5万人に及ぶほど増大した。当時、サイパンやテニアンなど北マリアナ諸島をはじめ、各地で流行していたのが、「行進踊り」である。これは、西洋人軍事演習の行進と号令を模して、20世紀初頭ミクロネシア東部のマーシャル諸島あたりで形成された「新しい」踊りであった。行進踊りは、収穫祭をはじめさまざまな場面で踊られたことで移民にも模倣され、「現地の人々の踊り」として沖縄にも伝わったのである。

今回は、行進踊りから派生し、沖縄各地に伝播した「南洋踊り」のダイナミズムを転移、変形、脈絡変換という、山口修が提唱した「変貌（トランス）の3つの側面」から論じた。その際、まず音楽・芸能のカテゴリーを時間と空間から動態的にとらえて示した。民族音楽学の研究対象は、ローカルな民俗芸能から新民謡、ポピュラー音楽、クラシック音楽・芸能へと拡張されてきた。その結果、南洋踊りのように「新しい」けれども古いカテゴリーの音楽・芸能の要素を引き継ぎ、ローカルかつグローバルな音楽・芸能の要素も含む「ハイブリッドな芸能」にも注目されるようになった。

次に、沖縄の南洋踊りとして、うるま市栄野比、宜野座村惣慶、竹富島仲筋の事例をとりあげ、小笠原の南洋踊りと共にそれぞれの音楽表現の比較を行った。いずれも、行進、掛け声、演目がメドレーでつなげられる点で、行進踊りの型を踏んでいる。また、≪ウアトロフィ

➤などの踊り歌が共通している。一方で、沖縄の南洋踊りでは、日本の流行歌を踊り歌に取りいれたり、伴奏楽器をハーモニカから三線に代えたりし、地域によっては太鼓やドラを加える例もあった。そして、いずれの地域においても、南洋踊りは「豊穡の力」を原動力とした平和を願う新たな踊りとして、移民の次世代、次々世代が継承していると論じた。

令和3年度 芸術文化研究所 客員教授・研究員一覧

〈客員教授〉

【芸術文化学部門】

波照間 永 吉 (琉球文学／文化学)

【伝統工芸部門】

柳 悦 州 (染織技術論)

〈客員研究員〉

【芸術文化学部門】

安 里 進 (考古学) 何 俊 山 (言語学)
呉 海 燕 (琉球歴史・琉球文化) 呉 海 寧 (沖縄思想史)
鄭 相 哲 (沖縄文学) 張 榮 蓉 (琉球・アジア陶磁史)
ビットマン・ハイコ (琉球・沖縄美術史)

【伝統工芸部門】

長 尾 紀 壽 (沖縄染織) ハンス・トムセン (日本美術史)
富澤 ケイ 愛理子 (日本美術史、沖縄近現代絵画史)

【伝統芸能部門】

梅 田 英 春 (民族音楽学) 高江洲 義 寛 (作曲・琉球芸能論)

〈共同研究員〉

【芸術文化学部門】

伊 禮 拓 郎 (琉球漆工史) 大 竹 有 子 (琉球文学)
我 部 大 和 (中国文学) 菊 池 誠 一 (考古学)
菊 池 百里子 (琉球・アジア陶磁研究) 喜屋武 千 恵 (琉球絵画研究)
久 貝 典 子 (琉球・沖縄染織文化史) 久保田 久美子 (絵画研究)
古波蔵 ひろみ (琉球芸能装束・結髪研究) 坂 井 隆 (アジア文化)

佐々木 和 子(琉球文学)	柴 田 圭 子(琉球・アジア陶磁研究)
世 良 利 和(沖縄映画史)	平 良 徹 也(琉球文学)
平 良 優 季(琉球絵画研究)	永 崎 研 宣(人文情報学)
仲 原 穰(琉球語学)	仲 原 伸 子(琉球文学)
仲 村 躰(琉球史・文化学)	西 岡 敏(琉球語学)
仁 添 まりな(琉球絵画)	樋 口 美和子(琉球芸能)
平 川 信 幸(琉球・沖縄絵画史)	藤 城 孝 輔(沖縄映画史)
前 田 勇 樹(琉球沖縄史)	松 永 明(琉球文学)
茂 木 仁 史(琉球芸能)	山 田 浩 世(琉球史)
山 本 正 昭(歴史考古学)	四日市 康 博(考古学)
胡 一 超(考古学)	李 海 霖(考古学)
盧 姜 威(空手研究・沖縄美術史)	サイフマン・トラビス(歴史学)

【伝統工芸部門】

大 城 水 絵(紅型研究)	崎 原 克 友(沖縄織物研究)
篠 原 あかね(沖縄染織研究)	仲 本 の な(紅型研究)
平 田 美奈子(紅型研究)	前 川 佐 知(アジア染織研究)
丸 田 勉(陶土研究)	山 田 葉 子(沖縄織物研究)

【伝統芸能部門】

粟 国 恭 子(文化人類学・文化論)	岩 井 正 浩(民俗音楽学)
大 城 盛 裕(民俗芸能論)	大 城 了 子(音楽学)
大 嶺 可 代(琉球芸能論)	小 越 友 也(アートマネジメント)
川 鍋 かつら(琉球芸能論)	古 謝 麻耶子(民族音楽学)
後 藤 育 慧(音楽学)	小 林 幸 男(民俗音楽学)
鈴 木 良 枝(民族音楽学)	高 橋 美 樹(民族音楽学)
中 島 由 美(言語学)	長 嶺 亮 子(民族音楽学)
平 敷 兼 哉(民俗学)	本 間 千 晶(音楽学)
又 吉 恭 平(琉球芸能論)	三 島 わかな(音楽学)
持 田 明 美(琉球芸能論)	與那城 常和子(民族音楽学)

和田 静 香 (琉球・八重山舞踊研究) 和田 信 一 (琉球古典音楽研究)
カーク・キング (民族音楽学)